

キャリア教育で学校を変える。教師が変わる。

昨日と同じような 今日にはならないように



千葉県・松戸市立松戸高校
進路指導主事、
キャリアアカウンセラー

椿 仁三千

つばき・やすみち ● 1963年生まれ。東邦大学理学部卒業。千葉県立船橋東高校講師。柏北高校、柏の葉、流山中央高校（現 流山おおたかの森）を経て、2005年松戸市立松戸高校に赴任。06年より現職。

文 堀水潤 撮影 渡邊カP 68、69 除く

松戸市立松戸高校（以下、市松と略記）の進路指導部長、椿 仁三千の周囲はいつも温かい空気で満ちている。物腰がやわらかく、笑顔を絶やさず、気持ちよく仕事ができるよう、誰に対しても気を配る。

先進校や大学、企業などに足を運んでは知見を広げ、自校の「キャリア発達プログラム」に落とし込むといった精力的な活動と裏腹に、「自分は、長」のつく役割に向かない。誰かの下でコーディネーター的に動きたいタイプ」と言い切る。

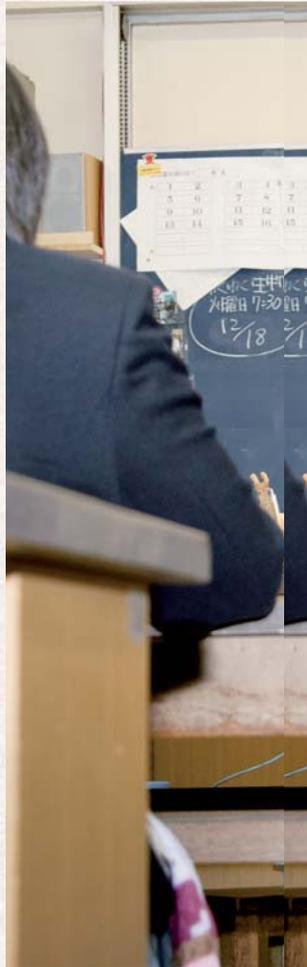
苦勞を見せないのも、裏方に徹して前面に出すぎないのも彼なりの美意識か。

担任を外れて久しいが、やさしい先生として、生徒からも慕われている。

「厳しく叱ることもありますよ。時には『こいつとの関係はもう終わったな』と思うくらい覚悟を決めて怒鳴りつけることもあります。けれど、次の授業で『補習を受けたい人？』って聞くと、何ごともなかったかのように、その生徒が手を挙げています。拍子抜けですよ。そんなことが何度ありました」

そんな先生だから、椿のことを悪く言う人はいないし、その口から人を悪く言う言葉も聞かれない。そうした、掛け値なしの「いい先生」が、進路指導の現場をどう変えてきたか。キーパーソンの証言を交えながら、その人物像に迫りたい。

● 椿が教職を志したのは大学卒業後。研究室に残り、有機合成の研究を続けてい



た時期だ。学部時代のような単位取得のための学びではなく、何のしがらみもない、純粹に学問に向き合うことの楽しさを知った椿は、いつぼうで研究を職業とする道の前途が多難なことも実感する。

「学問の楽しさに触れるとともに、能力の限界も知りました。そんななか、教師こそ、学びの楽しさに生涯ふれられる理想的な職業と思うようになりました」

実際に教職に就くと、そうしたことよりも、むしろ生徒の成長に携わるといふ教員本来の仕事による喜びを感じた。子どもたちが一生懸命、何かに打ち込む姿を見ているだけで心が躍った。それは5歳を目前にした今も変わらない。

1990年に初めて担当した校務分掌は進路指導。以来、「進路」から外れたことはない。当時はバブル景気のまったなかで、高校を卒業したばかりの未成熟な若者でも、大手企業の事務職などに普通に採用されていた。

「社会人としての教育は社会が行う。それが当たり前の感覚でした。就職に失敗してもやり直しがききましたし、進路に悩んでも結論を先延ばしできる余裕があ

りました。今とはまったく異なる時代の進路指導を経験できたことは貴重です」

その後、千葉県立流山中央高校に異動した椿はしだいに、単なる出口指導ではなく、将来を見据えた進路学習の必要性を感じるようになる。そうしたい思いに至る背景があった。

当時の同校は、4割が大学・短大進学、4割が専門学校進学、残りが就職や進路未決定という中位の進学校であり、学校として、4年制大学への進学者数を増やすことを目標としていた。ところが、その目標をあつさりクリアしたことが、逆に危機意識を高めることになったという。

「そんなに簡単に学力があがるわけはありません。単に、4年制大学の定員が増え、大学に入りやすくなっただけのことでした。AOや推薦入試などを活用し、入りやすい大学に入るといふ安易な選択。大変な時代になったと思います」

和井田先生とともに広がる世界

流山中央に赴任して7年目の2001年。37歳にして進路指導部長になった椿

は、それまで個人的あるいは単発的に行っていた実践をベースにした3年間の進路学習計画「キャリアエデュケーションプログラム」を立てる。

キャリア発達に応じて、1年次は自己理解を目標に、主にクラス単位で「人物調査」（歴史上の人物や芸能人など興味ある人物についてレポートする）や、「人生講話」（生き方や仕事観を語ってもらう社会人講話）などを実施。

2年次は、社会理解を念頭に、グループ単位で「職業調査」や「模擬授業」などを実施。3年次は、進路実現を目指し、個別援助を軸とした各種ガイダンスを展開するといったプログラムだ。

椿にとつて幸いだったのは、この時期、和井田節子が赴任し、03年に進路指導部の副主任になったことだ。和井田は、東京大学への派遣経験をもち、後に大学で教鞭をとることになる。教育相談やカウンセリングに精通した教員。学問を現場に生かすというスタンスで、前任校では不登校の生徒の対応など、個に視点をあてた個別援助の活動をしていた。

椿同様、物腰がやわらかく、けれど、芯の強い和井田は、年若の椿に対し、心理学や教育相談についてよく語った。そしてそれが椿の進路指導観を広げていく。

「進路指導やキャリア発達学習とは、要するに将来に対する不安を取り除いてい

くこと。そこにカウンセリングのスキルが生きることを学びました。私たちの進路指導に彼女のカウンセリングがマッチし、スピリットが入った気がしました」

和井田も同様の趣旨のことを言う。

「進路選択とは個の成長そのもの。進路指導は、その子にあったサポートをいかにするかという世界です。カウンセリングも一人ひとりの成長を支援し、未来に向かって生きていく力をつけることであり、両者に大きな違いはありません」

そして、こう付け加える。

「教育相談にかかわり始めた当初、先生方に『こういう子だから、こうした環境を作つてあげましょう』と言つても、『それは甘やかし』『二人のためにそんなことはできない』と言われたこともありました。けれど、椿先生に同じことを言うと、『ぜひ、やつてください』となる。流山中央の進路指導では、私がやっていたことを何倍も生かすことができました」

和井田の勧めで、椿は日本進路指導学会（現日本キャリア教育学会）に入会し、それまでの実践を体系的にまとめた。

「他律」に対して「自律」、「知識情報伝達」に対して「探究」という2つの対立概念を考えたとき、従来の出口指導は、「他律／知識情報伝達型」であり、これを「自律／知識情報伝達型」(II)受験勉強(へ促すことが目的になりがちであった。これに



上.引きも切らず生徒が相談にくる市松の進路指導室
下.教職員の語らいの場「フライデーズカフェ」

対し、主体的な進路選択を行うためには、「自律／探求型」への転換が重要だという理論も、この時にまとめられた。

03年には、上越教育大学で開催された同学会の研究大会で実践事例を発表。「新潟にカニを食べに行きましょう」という和井田の口車にのせられたかつこうだ。「現場の人間にとって論文をまとめるのは大変な作業です。正直、面倒ではありましたが、自分たちがしていることを振り返るいい機会ですし、外部から評価を受けることも必要だと思いました」

事実、それをきっかけに同校の取り組みは専門紙誌で取り上げられ、自分たちの立ち位置を知ることになった。

和井田の勧めで、筑波大学在職時の藤田晃之(現 国立教育政策研究所)のもとにも毎年訪問。その年の実践を総括した

ものを持参してはアドバイスを求めた。それにしても、和井田はなぜ熱心に、椿に研究の道を開こうとしたのだろう。

「根が理系ということもあり、椿先生は、一つの事象に対して『こんな課題があるね』『やってみて効果があつたね』だけでは満足しない人。『そのベースにどのような原理が働いているのか』『この先どこにつながるのか』など、いつも、全体的、立体的に理解をしたがっていました。進路指導部長という立場として、確かなものを欲していたように思えたのです」

それに、と和井田は続ける。「偉そうなので、誤解を招かないよう付け加えておきたいのですが、私自身、楽しかった。椿先生といることで世界が広がり、子どもたちも目の前でどんどん変わっていききました。彼は、昨日と同じように今

いつだって、 どこにいたって わくわくしたい

市松キャンパスの誕生

日があることを嫌う人。私も一緒にわくわくさせてもらっていました」

05年、椿は松戸市立松戸高校に異動した。5割が大学・短大進学、3割が専門学校進学、残りが就職や進路未決定という、流山中央とよく似た中位の進学校だ。

生徒の多くは、中学時の成績が真ん中付近。授業態度は比較的まじめで、教員の言うことは素直にきく。問題行動が少ない反面、自ら積極的に動こうとしない傾向があると多くの教員は口をそろえる。

生徒のほとんどが市内から通うため、同じような人間関係が続き、高校でカルチャーショックを受けることも少ない。

「そうした環境ではわざわざ県外に出よ

うという発想が起こらないのでしょうか、進学先には、同じような学校の名が並んでいました」

合格しやすいからという理由で大学や学部を選ぶなど、安易かつ受動的な進路選択の傾向が気になっていた椿は、翌06年、進路指導部長になると動き出した。

まず、進路指導室を整頓。生徒が入りやすいレイアウトに変更した。また、調査書やその他の書類の発行がスムーズに行えるよう業務フローを整えた。

そのうえで、前任校の実践をベースに3年間の進路学習計画を立案。

生徒が主体的に進路選択できる力を養うことを目的とした同校のプログラムは、真っ白なキャンパスをイメージして「市松キャンパス」と名づけられた。

具体的な進路行事としては、1年次は前述の「人物調査」「人生講話」に加え、「セツトアップガイダンス」(マナー講師によるコミュニケーションセミナー)や大学生による学習講座、「わくわくインタビュー」(身近な大人に行う職業インタビュー)など。2年次は、「進路ガイダンス」(大学や専門学校担当者によるパネルディスカッション)、「模擬講義」「職業調べ」(興味ある職業についてのレポート課題)。3年次は、個別援助を中心とした各種ガイダンスやセミナーなどが並ぶ。

これらを学年の裁量のもと、総合的な

学習の時間やLHR、長期休業を通じて、柔軟に展開していく。

「プログラムは進路指導部が作成しますが、実際にプランを運営するのは学年の先生方。担任が働きやすいよう、また、負担を増やさぬよう、私たちは黒子となり、実務をこなすよう心がけています」

いずれの取り組みもワークシートを多用し、終了後は感想を記入してもらおうなど、振り返りのプロセスを大切にしている。ワークシートなどはポートフォリオ「進路ファイル」で担任が管理する。

振り返りは生徒に課すだけではない。進路指導部では、行事ごとの振り返りよりも、年度末には1年間を総括して冊子にまとめる。効果がない取り組みは続けることに固執しないし、いいと思ったことは貪欲に取り入れる。取捨選択を繰り返すことで進路行事は精選されていく。

今年も、念願であった「カタリ場」(NPOカタリバ)による高校生向けキャリア教育プログラムを実施した。大学生スタッフのリードのもと、体育館に集まった2年生約360人が、グループごとに自分自身や将来のことについて語りあう姿に椿は衝撃を受けた。

「誰一人白けることなく、大学生の話に耳を傾け、自分の進路について真剣に語りあう様子を見て、頭を殴られたかのようなショックを受けました。普段、生徒の熱い思いを

十分に引き出せていなかった私たちは何なのだ、と反省しました」

このほか「スタディールーム」(学習方法やノートの取り方などを希望者にレクチャーする昼休みの補習)や、「集団討論セミナー」(看護職志望の生徒を対象とした試験直前の20日間に行う集中トレーニング)も、椿自らが担当している。

松戸市ゆかりの著名人のもとを訪ね、生徒がインタビューする「わくわくインタビュー・特別編」は、この5年間で、相撲部屋親方、宇宙飛行士、人気俳優、NHKアナウンサー、気象予報士のインタビューに成功した。ビッグネームも含まれるが、依頼の際に気後れすることはない。

「話を聞きたいと思った人には、すぐに連絡をとるようにしています。何かしたいと感じたら実行に移すのは普通のこと。そ

のことで生徒にいい影響を与えられるなら、なおさらです」

機会あるごとに、生徒が社会人とかかわる場を作るのは、その人たちの仕事観をじかに感じてほしいからだ。

「皆さん、人のため、社会のためといった使命をもって仕事に打ち込んでいます。その本気が伝わったとき、生徒の内に熱いものが芽生えるはず。それが、進路を決める原動力。結局、自分のためという理由で就職してもすぐに辞めてしまうんです。例えば、保育士になるのに、子どもが好きだからという理由だけでは不十分。成長を手助けしたいなどの強い意志があつて初めて過酷な業務をこなしていけると思います。主語が自分ではなく、人になったとき、強く生きていけると信じています」

福島先生とフライデーカフェ

赴任して間もない椿が、「市松キャンパス」を思い切つて展開できたのは、2つの間接的な理由があった。

一つは、腎臓を患ったこと。幸い、食事療法と投薬治療で済むことがわかり、一時は塞いでいた気持ちが晴れた。このとき、「もう一度、仕事に打ち込めるチャンスを与えられた」と、スイッチが入ったのだという。

もう一つは、福島毅(現 千葉県立東葛飾高校)という心強い味方が赴任してきたことだ。椿と福島は、初任校で1年を共にして以来の付き合い。同じ理科の教員で、親友といえる間柄だ。

福島は、3年間の市松在勤中、1、2年の学年主任として基礎学力の向上などに

主語が、自分から 人へ変わったとき、 強く生きていける



上. 大学生の話を実際に聞く姿が印象的な「カタリ場」
下. 「わくわくインタビュー・特別編」で気象予報士と懇談



上.生物の授業の一環で、図書室で調べもの
下.顧問をしている生物部の生徒たちと

この社会は、 人の心意気で 成り立っている

成果は、生徒に表れる

一連の取り組みの成果は、前任校同様、進学率の向上や、進路未決定率の減少として表れた。生徒一人ひとりに対するフォローが厚みを増したことで、ここ数年、進路の決定率は95%を超す数値で推移している。卒業してすぐフリーターになるような子は極めて少ないという。

学びたい学問や将来を考えたいうえで進学先を選ぼうとなり、「一般入試に挑戦する生徒も増えた。自然、進学先の大学や専門学校も多岐にわたるようになった。」

「そうした数字もさることながら、自分の将来を真剣に考え、迷い、進路指導室に相談に訪れる生徒が増えたことがうれしいですし、そうした生徒に骨身を惜しまずに対応する進路指導部の先生方のことを誇りに思います」

個人的にうれしいのは、進路指導室を訪ねてきた卒業生が、自分の知らない単語を当たり前のように話しているのを見ているときだという。

「例えば、看護師のためが二人で訪ねてきた際、私の横で、専門用語を交えながら『うちの患者が』なんていう会話をしていると、『ああ、成長したな』って、ついニヤニヤしてしまいます」

言葉遣いに難があった生徒が、飲食店で

いった背景があるのだろう。

「彼が本来もつ外向きの志向に加え、プログラムを通じて外部の人と接する機会が増えるうち、学校文化の常識を超えて物事が見えるようになったのでは」

と福島は推測する。それがはずれないことは、椿の次の発言からもわかる。

「取り組みを始めてから、私自身、仕事観が変わりました。さまざまな世界で活躍する人たちの仕事に対する情熱にふれ、世の中は人の心意気で成り立っている、ということを強く感じています」

椿が進路指導部長になり、福島が赴任した年の冬、二人は「フライデーズカフェ」という名の場を校内に作った。月に1度、学年や分掌を超えて教職員が集まり、コーヒーを飲みながら、教育について語り合うという気楽な勉強会だ。椿らのコーディネート

力を注いでおり、進路指導の仕事に直接タッチしていたわけではないが、進路指導室に顔を出しては、「これからの市松をどうすればいいか」「教員がもつと外に出て学ぶ姿勢をもつべき」などと語り合った。福島は、椿のことをこう評価する。

「進路実績を得意饒舌に語る人は多いけれど、彼はそうではなく『生徒にこういう力をつけさせたい』とか、『こういう人になってほしい』など、大きな視野で進路を語る人。彼と意見が対立することはありませんでした。違うのは、彼は多趣味という点。スキーはインストラクターの資格を持ち、ピアノも弾くんです」

特に両者に共通しているのは、学校外の教育力に期待していることだ。福島の場合、民間企業出身というバックグラウンドがあるが、椿の外部へのこだわりには、どう

きちんと接客をしていたり、ボーイッシュな
つた子が女性らしく身だしなみを整え、
金融機関でいいいな対応をしていたり
するときもそう。自分のことだけで精い
ぱいであつた生徒が、仕事に責任をもち、
人のために懸命に生きている。

「そんなシーンに出合うたび、温かい気持
ちに包まれます」

しかし、そう表情を緩ませてばかりい
られない。生徒の変化以上に、社会の状況
が悪い方向へと変わり、歯車が狂い始めて
いるのでは、と椿は危惧している。

「バブル時代が顕著でしたが、以前は、会
社がじっくり人材を育成してくれまし
た。また、少しくらい口下手でも、まじめに
コツコツできる子は一定の評価をされてい
ました。しかし、リーマンショック以降、そ
れが通じません。どんな職種でも求めら
れるのは等しく、明るく、協調性があり、
コミュニケーション能力に優れた子です。社
会に、人を育てる余裕がなくなってきたこ
とが残念でなりません」

生徒には酷だが、高校段階で、社会人と
して必要とされる力をしっかりとし身に
つけ、いわば完成状態にして送り出さな
いと、受け入れてくれるところは少ない。

言語活用能力の育成を

そう考えたとき、特に市松の生徒に必

要なのは、読解力や論理的思考力、表現
力といったコミュニケーション能力だと椿は
感じている。難題だが突破口はある。椿
は、そのヒントを、11年度より松戸市内の
小・中学校で始まった「言語活理科」とい
う教科に見いだした。

同教科は英語および日本語分野で構
成されるが、日本語分野では、例えば「結
論を先に述べ、その結論を支える理由を
言う」「根拠をpushして意見を構築する」
といったトレーニングを繰り返す。

松戸市教育委員会に在職時、中心とな
り同教科を立ち上げた岡本小枝は言う。

「言語活理科の目標は、自分の意見をわ
かりやすく伝え、相手が伝えようとして
いることを理解する力の養成です。今は、
一部のセンスのある子だけがその力をもつて
います。それを、小中学校で訓練した結
果、どの層も一定以上の力がつき、『松戸の
子は違う』という状態になってくれればう
れしいです」

ちなみに岡本は、日立製作所を経て中
学校の英語教員へ転身。現場で、言語能力
育成の必要性を痛感して以来、研究と実
践を続けてきた経歴をもつ。

椿は、彼女が市内の中学校に勤務して
いたころ、その活動を知り、「これこそ今の
高校生に必要な授業」と感銘を受けてい
た。勢い、フライデーズカフェに講師として
招いたこともある。

その岡本が、縁あつて12年に市松に赴任
してきた。

「初めての高校勤務で戸惑うことも多い
でしょうが、何とか岡本先生の力を借り
て、生徒にこの力を根づかせたい。生徒二人
ひとりの言語活用能力が高まれば、市松
キャンパスの内容も高い次元のものになる
と期待しています」

気持ちは高ぶっている。椿の口癖で言うところの、わくわく感がとまらない状態だ。

市松での勤務も8年を数え、そろそろ
異動の時期。進路指導部内には、「椿先生
がいなくなったら大変」という声が少なく
ない。けれど本人は心配していない。実践
の内容なんて変えていけばいい。大切な
はスピリット。進路に真剣に向き合い、成
長を遂げてきた生徒を多く目にしてき
た進路指導の先生たちならば、自分がい
ようがいまいが動いてくれるはずだから。

共栄大学の教育学部に籍を移し、学問
の世界と現場の橋渡しをしている流山中
央時代の同僚、和井田も、自身の研究テ
マを引き合いにこう話す。

「適切な環境づくりと働きかけを続け
るうち、ある時期を境に子どもたちは、将
来に向けて自分をよりよいものにしてい
こうと自ら動き始めます。その姿を見た
教師は、その気持ちに応えざるを得ない
もの。その時こそ、教師がやりがいを感じ

る瞬間です。一度、それを味わったら再び、
何度でも、そこを目指そうとするはず。
そうした体験を多く積んだ学校は、少し
のことでは崩れません。残すべきはシステ
ムではなく、そうした教師冥利につきる体
験です」

椿が現場にこだわるのも、懸命に成長
しようとする生徒の姿を、これからもすつ
と見守っていたからだ。(敬称略)

